

一師楽における年中行事と禊家組の成り立ちについて一

ノートルダム清心女大家政

○今田節子 園井球美子

目的 前報では、師楽における年中行事の変容実態を 伝承の背景である生活環境・禊家組の役割りの面からみてきた。今回は「禊家組の成り立ち」の面から、その存在の意義・必要性をさぐって中きたい。

方法 寛政9年(1797年)から禊家担当者を書き綴った「若宮御禊家廻帳」を中心に禊家組成立の過程を辿ると同時に、古老からの聞き取り調査も行った。

調査結果 禊家組は、年中行事を住民全てが平等にという経済的相互扶助の精神のもとで、7代目の頃(1797年)から始められた。当時は、一組2~3軒であったと推測され、貧富の差や地縁・家族構成なども考慮して組を編成していたらしい。現在までに組み替えが4回行われており、分家の増加・貧富の差・凶作・不景気・生活の不安定などの社会的背景の基に、祭事の負担を平等に軽減していくために組替えが行われたらしい。そして、地縁関係から血縁関係重視の組合けへと移っていき、地感が強い。現在は明治10年に行われた組合けが基礎となっており、血縁関係中心である。また、禊家組の責任者である禊本の決め方は、組によってまちまちで、「代々本家筋が務める」・「当初は本家筋が務めたが10代目(1900年頃)より輪番制」・「最初から輪番制」の三つの方法がみられた。禊本は経費・その他の面で負担が大きく裕福な家が務めるという原則があつたようだが、経済的差がなくなつた今日では、必ずしもそうとは言えない。以上のように禊家組は変容をくり返しながらも、200年もの間引き継がれ、年中行事を伝承してきた。その背景には、先祖は一つという血縁意識と同時に、限られた狭い土地の中で共同体として生活していく村人の知恵を感じた。